

誇りを胸に、文化を築く

今は、9月に収穫したブドウで、試験醸造を行っている段階。当初描いていたスケジュールよりも急ピッチに事が進んでいるようだ。

2024年にはテスト醸造を開始する予定。そこに向けて、事業に携わるスタッフは、道外のワイナリーへの視察や道内のワイナリーで研修をし、醸造技術などの会得に余念がない。

モノづくり企業らしさを

ダイナックスは自動車な

どの部品製造メーカーとして、トップシェアを持つようなモノづくりに強い企業だ。「車などに使う部品は同じ品質のものを作り出し、ていかならないといけないが、ワインは結果が違ってても良い。変数を楽しめるというのは面白い」と話す。果汁を絞って、酵母を入れ、発酵させて、熟成。同じ醸造行程を行っても、同じ数値のものが仕上がるということではない。天候・土壌など環境のコンディションによって、毎年出来上がるブドウに違いが生まれることだろう。だからこそ、毎年出来栄えの異なるワインが生

まれても許される。「だからと言って品質が悪いものを世に生んでいくのではない、高品質なものを安定して生み出していく。そこ

は、人命にも関わる部品のモノづくりをしてきたプライドとして、安心で安全で正確なものを作り届けるということをきっちりとしてきたい」と意気込んだ。

町民と共に盛り上がりを

「0から始まる事業なので、まちの皆さんにもブドウ栽培やワイン作りというものに興味を持ってもらえたら嬉しい」といろんなことを考えている。ブドウの苗木の定植や除草作業、収穫体験など。そして、福祉分野との共同事業ではすでに展開を見せている。感染

症が収束を見せたら、試験イベントであったり、町内の農畜産物などと合わせたフードイベントなどを試みたいと話す。町内のさまざまな要素がつながり合い、盛り上がりを見せるといった将来を夢見た。

文化を作りたい

「ただ安平町でワインを生産しているだけでは地域に根ざせたとはいえない」と話すほど、地域との関係性の構築が本事業において欠かせたくない思いのひとつであることが伝わってきた。一般的に「おしゃれ」や「高貴なもの」などのイ

メージを持つ人が多いのではないだろうか。少なからず私自身は、ワインに対してそういった印象も抱いていると稲岡さんに話すと、「必ずしもワインがそういうものでなければならぬ、という訳ではないけれど、それもまた魅力のひとつ。洗練されたものであれば、ワインを飲むことができなくても、ブドウが好きじゃないという人でも、気になって畑に足を運んでもらえたりするんじゃないかな」と入口に囚われないこのワイン事業は、安平町にどういった文化や習慣をもたらしていくのだろうか。

